

## 長野県飯島町における 6 次産業化と農商工連携の動向

- 農産物加工組織を事例として -

明治大学大学院 高橋 みずき

### 1. 背景と課題

農山村における地域活性化の方策として、農業の 6 次産業化と農商工連携への取り組みが盛んに行われている。6 次産業化、農商工連携はともに、農産物の加工、流通形態を多様化・最適化し、地域経済の活性化のための重要な戦略として位置づけられる。

6 次産業化、農商工連携に関する先行研究は多数存在し、相違点についても述べられてきた[1]。しかし、問題も少なくない。第 1 に、「6 次産業化」と「農商工連携」は、研究ごとに異なる定義で使用され、そのため一部で議論を複雑化している。第 2 に、6 次産業化と農商工連携の事例について、厳密に比較した研究はほとんどなく、6 次産業化と農商工連携との間に違いがあるのかについて、まだ考察が深められていない[2]。

そこで、本稿では、6 次産業化と農商工連携に対して、次のような定義を下し、長野県飯島町を事例として同地域内で比較することで、両者の違いを検証する。ここで、「6 次産業化」とは農林漁業者・地域住民が主体となった農業経営の事業多角化、「農商工連携」とは商業者・工業者主導による農業経営との事業連携と定義する。

### 2. 飯島町における農業

長野県南部、伊那谷のほぼ中心に位置する飯島町は、人口 9,902 人、総世帯数 3,242 戸、高齢化率 30.5%、総農家戸数 1,056 戸、専業農家率 13.2% である(2010 年)。

高度経済成長期の 1960 年代には、精密工場など多数の企業を誘致し、若者の農業離れと兼業化が進んだ。1986 年に、農業振興体制の一元化を目

的に、飯島町営農センターを発足させた。「地域複合営農」という理念の下、専業・兼業農家ともに農業を継続できるまちづくりを目指してきた。

しかし、農業就業者の高齢化・後継者不足と企業の町外移転という 2 つの問題が深刻化し、旧来の複合営農の継続が困難となった。そこで、地域資源の利活用を行う食品加工を導入することで、農業と商工業の新たな複合を目指している。

### 3. 飯島町における 6 次産業化

飯島町には、6 次産業化に取り組む 7 つの組織が存在する(表 1)。特徴として、①原料は、少量生産品や裾ものを活用する。②組織は、女性グループの活動や就労意欲を契機に、町や農協の支援・出資の下、起業した。③事業規模は比較的小さく、任意グループが多いが、多様な組織形態が存在する。④雇用については、女性が多く、主体的に活動している。⑤商品構成は、地域消費者のニーズに対応し、⑥販路は、町内の道の駅や近隣スーパー、給食など、地域内が中心である。

課題は、①資本力と設備投資の限界、それに伴う②販路拡大、さらに一部で③後継者不足が挙げられる。現に、組織 G は 2013 年 3 月に解散した。

### 4. 飯島町における農商工連携

飯島町において農商工連携に取り組む組織は 2 つ存在する(表 2)。

#### 1) 信州伊那栗の産地化

菓子製造を行う(株)S1 工房(現(株)E 屋、本社:岐阜県)は、高品質の栗原料確保を目的に、飯島町へ進出した。栗の導入にあたり、果樹栽培技術を応用ができること、また、他の果樹に比べ、栽培

表1 飯島町における6次産業化

組織	形態	販売開始	活動の契機	構成数(男性数)	原料農産物	主な商品
A	株式会社	1995年	郷土食の研究会	19名(1名)	ウルチ米,他	五平餅,おやき
B	農事組合法人	1990年	農協生活部会	9名(4名)	モチ・ウルチ米,雑穀,他	餅・おこわ
C	任意グループ	2003年	町のクラブ活動	7名(1名)	玉ネギ,ジャガイモ,他	パン・焼き菓子
D	任意グループ	1997年	有志メンバー	13名	大豆,ウルチ米	味噌
E	任意グループ	2002年	農協果樹部会	4名(1名)	リンゴ,ブルーベリー,他	ジュース,ジャム
F	任意グループ	2002年	趣味のグループ	3名	キュウリ,大根,他	漬物
G	任意グループ	2002年	趣味のグループ	2名	キュウリ,梅,他	漬物

註1) ヒアリング結果より作成。 註2) Gは2013年3月31日解散。

表2 飯島町における農商工連携

商工業者	生産者	技術指導	販売開始	事業の契機	原料農産物	主な商品
㈱S1工房	個人農家、農業生産法人	恵那生産者	2009年	高品質原料の調達	栗	
㈱U醸造	㈱T農産	信州大学	2011年	特産品開発	唐辛子	調味料

註1) ヒアリング結果より作成。

表3 飯島町における6次産業化と農商工連携の比較

事業形態	原料農産物	資本	施設規模	労働力	食文化	販路	技術
6次産業化	既存品目 少産品, 稀もの	内部	小	女性・高齢者中心	既存	域内中心	加工: 経験による技術力向上 農業: 製品に適した品種の生産
農商工連携	新規導入品目 一定の量・品質	外部	大	加工: 全般 農業: 女性・高齢者	新規	域内, 域外	加工: 確立した技術力を導入 農業: 新規栽培技術の習得

註1) ヒアリング結果より作成。

に手がかからず、収穫物も軽く、高齢者でも生産しやすい作物であることから、町はS1工房の要望に応じることを決めた。生産者も栽培技術習得のため、栗研究会を立ち上げた。S1工房や栗生産者などが出資し、製造・販売拠点となる㈱S2工房が設立された。その後、栗を栽培管理する農業生産法人が2団体、発足している。

課題は、予定収穫量に達していない点であるが、生産に伴う雇用の創出、耕作放棄地の解消、生産者の意欲向上など、多様な効果を生んでいる。

## 2) 酢と唐辛子を使った特産品開発

工場誘致を受けた㈱U醸造(本社:岐阜県)は、地域特産品として、唐辛子を使った調味料を開発した。品種選定や技術指導は信州大学の教員が行い、農業生産法人㈱T農産が契約栽培に応じた。唐辛子は、収穫物が軽く、収穫適期が比較的最長いため、収穫時機の融通が利く。女性や高齢者を雇用するT農産には適した作物である。

T農産の最大の利点は、設備投資せず、商品化が実現することである。また、T農産とU醸造は、①原料価格を協議できること、②情報発信力という2つの利点を共有していた。

## 5. 比較分析

飯島町の6次産業化と農商工連携について、相

違点を表3にまとめた。

6次産業化は、資本をはじめ、地域における既存の資源を活用した小規模な取り組みである。農商工連携は、外部資本とともに、新規農産物を農業技術とともに導入し、産地形成を図る。同時に、新規の加工技術、食文化も移入されている。

6次産業化では、事業の維持・拡大と製造技術力の向上、農商工連携では、食文化の定着と農業者の技術向上が課題である。

## 6. おわりに

本稿では、6次産業化と農商工連携について、最初に両者を定義し、飯島町の事例をもとに比較した。現段階においては、6次産業化と農商工連携の組織は相違点が多く、相互の接点はほとんど見られなかった。

今後は、6次産業化・農商工連携と地域農業・産業との関係性などについて検証していきたい。

## 参考文献

- [1] 杉田直樹、中嶋晋作、河野恵伸「農商工連携、6次産業化の類型的特性把握」『日本農業経済学会論文集』2012、pp122-129
- [2] 櫻井清一「農商工連携の展開にみられる諸課題」『農業市場研究』2011、pp62-67